

087	071	059	052	050	049	048	046	044	042	040	038	032	030	017	015	013
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

編集長独白

表紙の時計／ルイ・ヴィトン フライング トゥールビヨン ジュネーブシール

Editor's Choice!

ジャケドローブ、ブレイ・ウルミニット、バイヨン、ブルガリ、パピヨン、トゥールビヨン、セントラル、エルメス、スリムドゥエルメス、
 ヴァシユロン・コンスタンタン、オーヴァーシーズ、グラスヒütteオリジナル、セネタ・クロノメーター、
 マニユファクチュールロワイヤル、1770 オートヴォルティージュ、ブレゲ、タイプXXI 3817、オーデマピゲ、ロイヤルオーク オフショア、
 ブランパン、フイフティ、ファゾムス、バチスカーフ、オメガ、シーマスタ、プラネットオーシャン、ディープブラック、
 クロノスイス、シリウス、フライング・レギュレーター、マニユファクチュール、ベキエ、リューロワイヤル、5フォンクシオン GMT

世界は時計で回っている。

パテックフィリップのミット・リピーター

懐中時計の時代から培われた技術から生まれる魅惑の音色

リシャール・ミル RM 029 & RM 030
 カラーで日本を表現した限定モデルが入荷

シヨパール ミットレミア 2016 レース・エディション & シヨパールのミットレミア 2016 年モデル

ティファニー ティファニーイーストウエスト & デイファニー CT 60 デュアルタイム 古き良き時代のニューヨークの鼓動と活力を腕に

TASAKI クラスタ、リファインド、リペリオン & オデッサ
 日本のジュエラーが発信するタイムピース第2弾

ピアジェ エンペラドル・クッション 700P
 メカニカルとクォーツのハイブリッドに挑んだピアジェ

ピアジェ ポロ S
 新しい時代の開拓を目指して

シャネル J12 XS
 J12 が表現する女性の「極端」(エクセシブ)

パネライ ミノールドゥエ
 ルミノールの歴史に新たな1ページを開く新型ケース

ラファブリク・デュタン
 旅の冒険は果てしなく続く

ルイ・ヴィトン
 時計のなかで育まれる個性

マニユファクチュール
 新たなステージの構築が進む時計製造

ブルガリ
 創業110周年を迎えた
 モンブラン
 尊重すべき伝統と挑むべき進化

- 098 イタリア・エルベ島にロックマンを取材
- 海沿いのイタリアン・マニユファクチュールの実力**
- 102 時計ジャーナリスト 瀧澤 広の「マイ・チヨイス」 第20回 同軸式積算計つきクロノグラフ
パテック・フィリップ・ノーチラス／オメガ・スピードマスター／WCポルトギーゼ・ヨットクラブ
腕時計新着情報
- 104 ヤング・タレント・コンペティション2016
- 110 自由な発想から生まれる未来の時計創造を託す若い才能を発掘
- 112 〆COMMON TIME 横浜元町本店(CHARMYウオッチ館)移転オープン
ゆとりある空間が提供する、時計を買う楽しさ
- 113 〆スピリット・オブ・ブライティング 仙台 by H.F. AGE
東北地方で初めてのブライティング・コンセプトショップ誕生
- 114 A.ランゲ&ゾーネ直営ブティック移転リニューアル
時計同様にディテールに凝った新店舗で多くの発見に出会う
- 115 グルーベルフォルセイ・ヴィエルクス 銀座ブティック
異なる世界観の時計に見守られ、高級機械式時計の真髄に触れる
- 116 〆THE TIME LOUNGE N X ONE 〆オープン
未知の時計、探し求めていた時計、さまざまなお出合いを提供
- 117 彫金師 金川恵治氏の工房兼ショップ、Kクラフトジャパン
「世界にただひとつの時計」という夢を実現させる場所
- 118 ウオッチコーデイネーター資格認定試験
上級資格を新設し、11月1日に受験申込を開始
- 119 セイコーミュージアム
GSの3つのムーブメントを理解するための最先端デバイス導入
- 120 ユリス・ナルダンの日本国内販売店
ダイバーコレクションに日本限定の「ポパイ」登場
ベレンス社と中国のジーリー・グループが契約締結
スウォッチグループが次世代バッテリー開発に参入
〆マリー・アントワネット ヴェルサイユの王妃展
ブレゲがマリー・アントワネットの回顧展をサポート
- 122-128 インフォメーション／問い合わせリスト／次号予告

ラ・ファブリク・デュ・タン ルイ・ヴィトン

旅の冒険は 果てしなく続く

1854年に16歳のルイ・ヴィトンがパリに工房を設けて旅行鞆の製造を始めたことでルイ・ヴィトンの幕があがる。旅が冒険心あふれる富裕な人々だけに許された時代だ。それから160年以上を経た今日、旅は大きく変化を遂げた。しかしルイ・ヴィトンにとって「旅」こそ、もの作りのテーマであることは変わることはない。21世紀になって登場した腕時計も同様だ。わずかな期間にルイ・ヴィトンの時計は目覚ましい発展を遂げた。その発展の過程もひとつの旅路にほかならない。



「エスカル スピン・タイム オトマティック チタニウム&ホワイトゴールド」。チタニウム製のミドルケースと裏蓋に、18KWGのベゼル、ラグ、リュウズを組み合わせたケースに、自動巻きのCal.LV77(26石、毎時2万8800振動、パワーリザーブ約42時間)を搭載する。ケースは直径41.0mm、厚さ11.2mm。参考価格453万6000円。

マニユファクチュール・ブルガリ

時計のなかで育まれる個性



今年のバーゼルワールドでブルガリは「オクトフィニッシュミニッツリピーター」を発表した。

これによってオクトにはスタンダード・モデルからハイコンプリケーションまでが揃い、ブルガリのメンズ・ウォッチの大きな柱として発展していることを示した。

その一方で女性に向けた工芸的なモデルの開発にも力が注がれる。

それはジュエラーとして培ってきた美的な表現の延長線にあるもので、

今日のブルガリを語るうえで欠かすことができない要素だ。



「ディーヴァ ドリーム トゥールビヨン」。直径37mmの18Kピンクゴールドのケースに手巻きのCal.BVL208(22石、毎時2万1600振動、パワーリザーブ約64時間)を搭載する。ベゼルと扇形のラグに76個(約1.76ct)、文字盤に24個(約0.06ct)のブリリアントカット・ダイヤモンドをセットする。3気圧防水。予価1689万1200円。

新たなステージの 構築が進む時計製造

創業110周年を迎えたモンブラン

モンブランがインク漏れがない万年筆を開発し、その製造工場をハンブルクに設立してから今年には110周年を迎えた。この110年の間に万年筆のトップブランドとしての地位を築くとともに、レザー・グッズや時計の自社工場での製造にも力が入れられてきた。腕時計の発表は1997年で20年足らずだが、2013年にCEOに就任した、ジェローム・ランベール氏の指揮の下、より明確な個性をもった時計の開発と時計ブランドとしての再構築が進んでいる。



2016年のSIHHで発表された
“モンブラン 4810 エグゾトゥールビ
ヨン スリム 110周年記念エディション ノース
アメリカ36”。ヴィルレの工房で開発された、ストップセ
コンド機能付きのエグゾトゥールビヨンを装備した自動巻きの
Cal.MB 20.34 (29石、毎時2万1600振動、パワーリザーブ約48時
間)を搭載。直径42mmの18KWGケース。価格4万3500ユーロ。限定38個。

Photo/Yoshihisa Kumagai(P.74~P.81) Courtesy of Montblanc
Text/Tomoko Kayama(WPP) Special thanks to Ms. Masami Nakamura Füeg

ローマン・ゴティエ

“尊重すべき伝統”と “挑むべき進化”

スイスのジュウ渓谷に生まれ、
育った人の多くにとって、なんらかの
形で時計づくりに携わることが運命づけられて
いるようだ。ローマン・ゴティエ氏の場合も例外ではないが、
他の人とは異なるアプローチで時計工房を創業した。
彼は起業家となる準備を万端に整えて事業に着手した。
その意味では運命を自ら切り開いていったといえるだろう。



「ロジカル・ワン ナチュラル・
チタニウム」。P96 は裏蓋側。白
の高温焼成エナメル文字盤と
ブルースチールの針を備えた、
2016年の新作。価格1566万円。

イタリア・エルバ島にロックマンを取材

海沿いのイタリアン・マニユファクチュールの実力

デザイン性の高さで日本でもファンを獲得してきたイタリアン・ウォッチ・ブランド、ロックマン。しかし、デザインのみならず、自社ムーブやコストを抑えた自社製フォージド・カーボン・ケースを製造、さらに時計学校まで設立しているという。これまで見落とされてきた、このマニユファクチュールの実力を検証する。

取材・文／松河彌靖 写真／山下亮一



イタリアはエルバ島にあるロックマンのファクトリー内で、ケーシング、検品などが行なわれているスペース。窓の外にヨットが係留されているマリーナやビーチが広がっている。スイスでは見られない、ここならではの光景だ。



1階にロックマンのロゴが見える白い壁面のスペースがファクトリー。2階には広いテラスを持ったレストラン「コンチキ」があり、ここもロックマンの経営。さらに2階の向かって左手奥に、時計学校S.I.O.がある。



広場に面して向かって右の建物は、築200年以上になるもので、ロックマンが1991年に初めて出店した直営ブティックとなっていた。向かって左のロゴの見える建物から奥に向かって、社屋やファクトリーが連なっている。

マリーナとビーチを見渡す エルバ島の工房

ティレニア海に注ぐ真夏の日差しが眩しい。パラソルの花が咲くビーチには、リゾートを満喫する人々が轟めき、それに続くマリーナには何艘ものクルーザーが係留され洋上での悦楽に備えている――。

腕時計工房のレポートを、こんな書き出しで始めるなんて、考えたこともなかった。通常、腕時計のファクトリーといえば、緑豊かな山村や静かな湖畔、あるいは郊外のファクトリーエリアなどにあることが多いからだ。

今回、筆者が訪ねたのは、イタリア半島とコルシカ島の間に浮かぶ小さなリゾートアイランド、エルバ島。ナポレオン・ボナパルトが299日間幽閉された場所として、またダイビング界のレジエンド的存在ジャック・マイヨールの終焉の地として、ご存知の方もいるだろう。そんなエルバ島の南側に位置するハーバー沿いに、ロックマンの本社があった。

個性的でインパクトのあるデザインのイタリアン・ウォッチとして、これまで日本でも一定の認知を獲得してきたロックマン。2015年春に、それまでのデスクトップビューターから、新設されたロックマン・ジャパン社に業務が移り、より品質や製造に関する情報が伝えられるようになってきた。その中には、ロックマンはイタリアで唯一、自社ムーブメントを製造するマニユファクチュールである。ことや、通常高価格になるフォージド・カーボン・ケースを自社内で切削加工し、コストダウンを図っている。こと、また、時計学校も設立し、後進の指導にも取り組んでいる。ことなど興味深い内容が含まれていた。これらの事実を検証するべく、トスカナ沖へと飛んだ。

自社ムーブの夢を実現させた ロックマン30年の足跡

冒頭に書いた、まさにマリーナ沿いの自社ファクトリー前の広場で、ロックマン社長マルコ・マントバーニ氏は、取材